

急ぎ過ぎだよ 人類ほ。

ゆるやかなネットワークを目指す

ITより
逢いてエ

雑報 縄文

いろんな考えがあるが面白い
いろんな人がいるが楽しい

No. 503

2018年12月

編集・発行 鈴木厚正

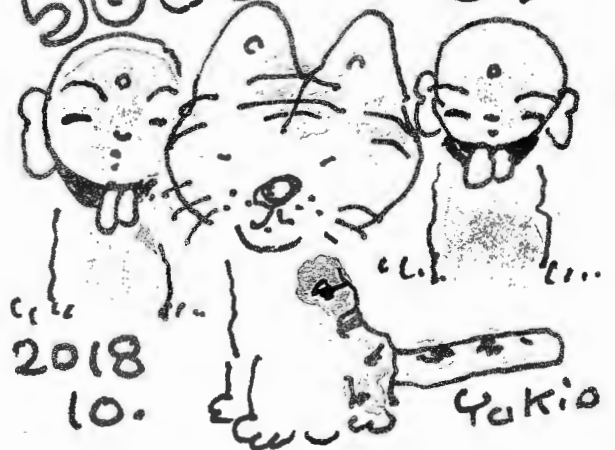
〒266-0005 千葉県緑区菅田町2-21-359

T&F 043-291-2917

も・く・じ

● あの山の向こうに ①	2
● お父さんの介護報告	4
● 秋の夜長に哲学書を読んぢみ	6
● 「縄文」502号に反応	8
● 「中国経済成長の尻」ほか	10
● お便利から	14
● 山仕事(10月、大平)	23
● け・い・じ・ば・ん	26

雑報・縄文
500号おめでとう



泉ゆきをさん
(N-ジに「お便利」)

(鈴木希理恵さん、ご見逃さい。
「生物多様性……」の続き、
また先送りしてしまいました。)

この見本誌をみて新たに

「読んでみようか」という方は、

2018年3月までの 7ヶ月 × ~~250~~ 250円を

郵便局で 00100-2-20630

「雑報友の会」

へ 併い込んで下さい。

11月20日現在の
会員数 251名

題 字 故 佐村隆英和尚 (千葉県長柄町本光寺住職)

カ ッ ト : 泉ゆきをさん (にっぽん箱絵の会会長)

印刷機 リングラフ R330

※ この号の切手は、

森の贈りものシリーズ 第2集
Gifts from the Forest Series No. 2

山仕事(10月、大平)

今回、原田さんと二人だけ。康江さんは父ちゃんが亡くなった後始末。佐藤(寅)さんは、学生時代の恩師を囲む会。山崎さんは、總御の結婚式。もう10年余り前、佐藤さんと二人で通っていた頃に送戻りだ。

10月13日(土)。敷地駅で、正士、久米、若林さんに迎えられる。迎への人数の方が多かった。 24号

正士さんから、直前の台風による被害状況をきく。台風は当地のほど真上を通ったらしく、予想外の影響があった。停電が9月30日夜から10月3日夜まで三昼夜続いた。オール電化の家は手上げで、スマートフォンなどの充電は回復の早かった妹さんの家まで行ってしたという。

倒木もかなりあった。最大の木は家の裏手のアラカシで、胸高直径70cmほどの大木が根をあらわに、仏壇返しになっている。家の西側の斜面では、道路脇のウメが2本やられ、その上部のイヌツゲも2本の幹の1本が折れている。庭



では、直径30cmほどのオガタマの木が、地上5~6mのところで折れていた。

日没が早くなったので、買い物組と二手に分かれ、若林さんとぼくはウメの木の前で草を刈る。しめりがちの斜面は滑りやすく、若林さんが足をとられて痛めてしまった。森町の知り合いの医者のもとに行く。

久しぶりに竹中さんが参加され、英ちゃん、久米さんと共に厨房に入る。三人が調べてくれた夕食は、豆腐とキクラゲとシタケの炒り煮、タコと長芋とワカメ・キュウリの酢のもの、サケ・人参・ネギ・小松菜と春雨の炒めもの、うす切り豚肉のステーキ、スペイン風オムレツ(これは、前日の29日、松戸市の鈴木秀人・秀子さん家で山ちゃんと4人でテニスをしたあとご馳走になり、帰り際に秀子さんが持たしてくれたもの)、そして竹中さんが横須賀から持参したマグロヒタイの刺し身。これが素晴しかった。こんは刺し身、いつ食べたろう。勿論、正士さんの手打ちそばと久米さんのだしそばし。



人数が少ないので、久しぶりに囲炉裏のそばで眠る。

10月14日(日)、曇り。草刈りはあとに回し、倒木の整理に集中する。松田さんがカツラのづけを拵って参加。

ウメ2本とイヌツゲを片付け、産のオガタマの木にかかる。オガタマとは見かけぬ木で、『原色牧野植物大図鑑』には次の記載があった。

もくれん科オガタマノキ属

「関東から琉球の暖地に生え、神社の境内などに栽植される常緑高木。葉は互生し長さ6~10cm。花は春径3cm位。和名は招霊(おきたま)の転化。枝を神前に供えて神霊を招き(おき)たてまつるというのに基づく。また、

小香(おか)と奥が玉に似ているから、オガタマ。サカキの本物はこの樹という説もある。枝は床柱、家具、楽器になる。近縁に、モクレン、コブシ、ホオシキミ、ユリノキなど」

5~6m残った幹も伐倒する。白い木肌が美しい。40cmほどの長さ

に玉切りし、椅子として使うことにした。オガタマに枝を折られたケヤキの若木も伐倒。これらの枝は細かく刻み、後で燃す。

昼食は、下関の兒林(伊藤)和代さんから送られてきたパンに、松田さん手製のカツラのづけ、シチューとサラダ。松田さんが持ちだした、地球大絶滅の話題に花が咲く。



「原色牧野植物大図鑑」
北隆館蔵

午後は、残った大物、家の北側芝川に下る斜面を横切るように倒れたアラカシにかかる。太さの割に、意外なほど根の量が少ない。そのため、風に耐えられなかったのだらう。主幹から分かれた枝は、数年前、竹を伐って積み重なった上にかかっている。竹は腐り、ふみこむと砕けて足が沈む。足場の悪いなか、枝の先の方から順次切り落としていく。

そのとき、主幹についていると思った太さ20cmくらい、長さ2m余りの枝が突然折れて、ぼくの左足に当たり、たまたま倒れてしまった。一瞬、「明後日のテニスができるだろうか」という思いがよぎった。幸い、枝が太

ももが膝、ふくらはぎとこするように落ちたので打撲だけで済んだ。まともには膝に入っていたら、テニスはできなかったろう。

そのあと、正士さんも、倒木のまきど之となっておしまげられた竹を切っていて、竹がはね返り仰向けに倒されてしまった。こちらもケガがなくよかった。伐っているとき、思わぬ振舞いをするところがあるので、気をつけなくては。

夕暮れが迫り、松田さんは所用のため帰宅。残念。それでも、長い間首の治療にかかっていた伊藤憲一郎さんが、11月が復帰のもようであった。

この日の夕食は、鶏肉にカボスのソースかけ、小松菜とベーコンとカツのカタルーニャ風(これ、何と説明してよいや)、長芋のステーキに明太子ソースかけ、久米さんの頂き物のセイゴとカボチャの天ぷら(初めはピカタ風とのことだったが、天ぷらに変更+あり)、こんにゃくの田楽、銀杏(久米さん)、茹でキャベツの明太子添え、生薑みそ、そば。

10月15日(月)、くもり。社用で西の方へ行くという竹中さんを送り、正士さん、英ちゃんも、残ったアラカシの主幹の整理にかかる。膝に痛みの残るばかりは介添え役。チェーンソーの刃が届かないので、二人が交互に幹の両側から切り込んでいく。斜面を転げ落ちないように、石などをあてがう。



こうして三つに切断した。このあとは重機に任せるしかない。

昼食は、シーフードスパゲティ。

帰りかけ、20日(土)にぼくちに見える菅原さん(“おがり火”発行人)に差し上げてと新米3kg、炊いて2kgを持たされる。脊の負担にならぬよう小さいバッグなので入れるのにひと苦労。天災線の時刻が迫ると、久米さんが自分の車でとび出した。間に合わない時は、体を張って停めてくれるつもりだったのだ。ありがとう。



カメラ：正士さん